

Title	『アンジェリック』覚書
Sub Title	Notes sur "Angélique" de Gérard de Nerval
Author	鵜崎, 明彦(Uzaki, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.98- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0189">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0189</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『アンジェリック』 覚書

鵜崎明彦

## 序

ジェラルド・ド・ネルヴァルの作品集『火の娘たち』(1854年)収録の『アンジェリック』は、1850年に『ナショナル』紙に連載された『塩密輸人たち』前半部が独立改作されたものである。後半部はエッセー集『幻視者たち』(1852年)に『ド・ビュコワ神父の物語』の題で収められた。『アンジェリック』は新聞の編集長宛12の書簡という構成であるが、内容を要約すれば以下の三つのテーマを認めることができよう。

(1) 『世にも稀なる出来事、あるいは神父ド・ビュコワ伯爵殿の物語、特に司教裁判所とバスチーユからの脱出記、云々』という題の、ルイ十四世時代の反体制的人物に関する奇書をめぐる本探しの話。事実上新聞小説の掲載を禁じたリアンセの新聞法改正案<sup>1)</sup>が施行され、作家である「私」は客観的事実に立脚した作品を制作する必要に迫られる。そこで、このまだ手に入れていない奇書を基に歴史の著作を書くことにして新聞の編集長にその予告までしてしまう。が、図書館や古本屋を巡ってもこの本が一向に見つからず、「私」はやむなくこの本探しの経緯そのものを語ることにする。

(2) 本探しの途中、「私」は国立古文書館でド・ビュコワ神父の大伯母にあたるアンジェリック・ド・ロングヴァルの手記を発見する。名門貴族の娘アンジェリックとその父の伯爵に雇われた豚肉屋の息子ラ・コルビニエールの駆け落ち話である。「私」は見つからない稀書の代わりにこの手記を紹介することにする。

(3) そして「私」はビュコワ一族とロングヴァル一族の資料を求めてヴァロワ地方へ旅行するが、この地方は「私」の幼年時代の場所でもあり、

アンジェリックの手記の紹介と同時にヴァロワ地方の散策記が進行する。

本探しの話は人から人、場所から場所へと絶えず移行・脱線を重ね、やがてアンジェリックの手記の紹介によって中断される。そのアンジェリックの手記も、「私」が巡るヴァロワ地方の町の模様や、それらの町にまつわる思い出などによって常に分断され、どちらが話の本筋でどちらが脱線なのかわからなくなってしまふ。そして最後に本探しの話が再開され、「私」はついにド・ビュコワ神父の物語を手に入れるが、結局この神父の物語は語られず、末尾でこの神父については自著『幻視者たち』を参照してほしいとあり、唐突な幕切れとなる。一方では、これらのテーマが相互に緊密な関係を持っているようにも見えない。神父とアンジェリックは遠い縁戚関係があるにすぎず、アンジェリックと「私」はヴァロワの出身であるという共通点しかない。従って『アンジェリック』という作品はこれら三つの異質な要素が雑然と混合された一種のコラージュ的作品と見えるのであり、絶えずテキストを断片化する語りの脱中心的な、戯言的な性格ばかりが目立つのである。

しかし、こうした移行・脱線を繰り返す断片的構成こそが、互いに遠く隔たった諸要素を関係づけ、再構成を促すのであり、表面上の混乱の下から、ネルヴァルが『東方紀行』(1851年)で探究した神話的形姿が浮かび上がるのである。ネルヴァルは中心部(第4-9の手紙)に位置するアンジェリックの手記を媒介に、そしてヴァロワの風物・事物を舞台装置にして、神話と個人的体験の融合を試みているのであり、『アンジェリック』は『シルヴィ』や『オーレリア』において完成される個人神話創造の序曲を成しているのである。そうした神話的形姿の存在を指摘し、諸要素の再構成によるテキスト全体の意味の変容を考察しようとするのが、本稿の目的である。

## I

アンジェリックの手記に関しても、リアンセ修正案に抵触することを恐れて——あるいは恐れるふりをして——、ネルヴァルは常に客観的記述を

標榜しており、手記を紹介するに際しても次のように述べている。

«(. . .); j'en ai pris quelques extraits que je tâcherai de lier par une analyse fidèle.» (p. 179. 「第4の手紙」強調筆者)<sup>2)</sup>

そして実際に、アンジェリックの手記そのものについて言えば、彼女とラ・コルビニエールの駆け落ちまでの経緯や二人がヨーロッパ各地を転々として行く様が淡々と転写されており、細かい心理描写などの潤色は表面上は見当たらない。ところがこの *analyse fidèle* という表現がいわばくせものであって、アンジェリックの言葉がそのまま一人称で引用されるのはむしろ稀であり、ネルヴァルが三人称に置き換えて伝えたり、さらには注釈まで加えたりしている。こうした引用行為によって、アンジェリックの手記はその孤立性を脱して、新しい文脈の中に徐々に引き入れられていくのである。

まず、手記の性格についてネルヴァルは、貴族の娘のものにしてはルソーの『告白』よりももっと赤裸々であるとしている (p. 180 「第4の手紙」)。ところが、ネルヴァルの注釈はこれに逆行するように進んでいくのである。例えば、父の伯爵の目を盗んで二人が逢引を繰り返すようになってもその関係は純潔だったと強調し、次のように注釈する。

«— Du reste, même endormis l'un près de l'autre, leurs caresses étaient pures . . . » (p. 185 「第4の手紙」)

さらに「第5の手紙」冒頭でも注釈を続け、こうした関係を次のように説明している。

«C'était l'esprit du temps, où la lecture des poètes italiens faisait régner encore, dans les provinces surtout, un platonisme digne de celui de Pétrarque. On voit des traces de ce genre d'esprit dans le style de la belle pénitence à qui nous devons ces confessions.»  
(pp. 185-186)

ペトラルカへの言及は、傭兵として働くためにドイツへ赴くラ・コルビニ

エールに同行して彼女がイタリアを離れる時の注釈にも現れる。

«Cette admiratrice de Pétrarque quittait avec peine ce doux pays d'Italie pour les montagnes brumeuses qui cernait l'Allemagne.»

(p. 208 「第8の手紙」)

こうしたプラトニックな傾向は、自分をヨーロッパ各地に引きずり回す、この良い夫とは言えない男に従順に従って行くアンジェリックに寄せる、ネルヴァルの次のような注釈によって頂点に達していると言えよう。

«Pendant en constatant quelques malheureuses dispositions de *celui* qu'elle ne nomme jamais, elle n'en dit pas de mal un instant. Elle se borne à constater les faits, — et l'aime toujours, *en épouse platonicienne et soumise à son sort par le raisonnement.*»

(pp. 207-8 「第8の手紙」 *celui* 以外強調筆者)

ルソー風の赤裸々な告白からプラトニックな愛へのこうした変容は、アンジェリックの手記が新しい文脈の中に組み入れられたことを示しているであり、従って我々は彼女の手記をネルヴァルのテーマとの関連で考察すべきであろう。

さて、ネルヴァルにおけるプラトニックな愛のテーマで思い浮かぶのは、『東方紀行』(1851年)の「序」第14章で語られる、16世紀のイタリアの修道士であり通称『ポリフィルス』の作者であるフランチェスコ・コロナの恋であろう。ここでネルヴァルはシャルル・ノディエの遺作『フランシスクス・コルムナ』から借用しながら、シテール島への精神的な愛の巡礼を語っている。それによると、貧乏画家コロナとトレヴィゾの王女ルクレチア・ポリアは、愛し合いながらも身分違いのため結婚できない。「平等の神」であるはずのキリストの祭壇が二人には禁じられているのである。そこで二人はより寛大な神であるウェヌス(アプロディーテ)の加護を祈り、現世では修道僧、修道女として別れて暮らしながら、それぞれ夢の中で時空を超越して愛の島シテールへ巡礼し、女神ウェヌスの神殿で精神的結合をとげ、コロナはこのことをポリアという女性とポリフ

イルスの物語として本に著す。それが『ポリフィルス』である、というのである。

これをアンジェリックの物語と照合してみるならば、身分違いの結婚という要素は類似しており、「平等」を唱えているはずのキリスト教がこの結婚を許さないというモチーフに関しては、実際にアンジェリックたちがローマで結婚を請願するが許されず、「教皇の顔を拝みもせず」(p.203)ローマを去るというくだりが「第7の手紙」にある。さらにこのモチーフは、アンジェリックの物語の最後にネルヴァルがそのまま引用している、彼女の従兄弟にあたる僧の考察によって強調されるのである(p.214「第9の手紙」)。それによると、この僧は豚肉屋の小せがれと自分の従姉妹の身分違いの恋を理解することができず、すべてはラ・コルビニエールが麻薬を用いたためだとしているのである。従ってこうした類似性に基づいて、ネルヴァルはアンジェリックの手記をコロナの恋と重ね合わせ、この物語をいわば神話化しようとしているわけである。

ところで注目すべきなのは、アンジェリックの物語とは一見何の関係もなく進行しているように見える本探しの話とヴァロワ散策記の様々な要素が、アンジェリックのこうした神話化に照応していることである。

まず、既に述べたように、ネルヴァルはノディエの『フランシクス・コルムナ』から精神的な愛の主題を汲み取ったのだが、『アンジェリック』の本探しの脱線はノディエの面影に満ちているのである。「第3の手紙」に挿入された「魔法の呼び鈴」は、アルスナル図書館にまつわるエピソードであるが、ネルヴァルはその中で、アルスナルの図書管理人の一人としてノディエの名を挙げ、自分の文学上の師と呼んでいる。そして「第12の手紙」に挿入されている二人の愛書家のエピソードでは、実際に『ポリフィルス』の初版本についての言及があるのだが、ノディエの『フランシクス・コルムナ』は『ポリフィルス』の夢の初版本を探して歩くところから話が始まっているのである。つまりどちらの作品も本探しを発端としているわけである。こうしたノディエの現前は、アンジェリックの物語とコロナの恋の重ね合わせに対する一つの伏線となっていると言えよ

う<sup>3)</sup>。

さらに要素間の照応はこれにとどまらないのであって、アンジェリックの手記を常に断片化する形で割り込んでくる語り手のヴァエロワ散策記の描写には、このプラトニックな愛の舞台装置を構成するように、まさしくそのシテール島を喚起するいくつかの言及が見られるのである。まず「第5の手紙」では次のような記述がある。

«Le voyage à Cythère de Watteau a été conçu dans les brumes transparentes et colorées de ce pays. C'est une Cythère calquée sur un îlot de ces étangs créés par les débordements de l'Oise et de l'Aisne, ces rivières si calmes et si paisibles en été.» (p. 189)

そしてサンリスの修道院の入口では次のような光景に出会う。

«Les petites filles se levèrent de l'escalier et dansèrent *une danse singulière qui m'a rappelé celle des filles grecques dans les îles.*»

(p. 191. 「第6の手紙」強調筆者)

さらにエルムノンヴィルの泉の描写では。

«Au bord des eaux, *des temples ronds, à colonnes de marbre, consacrés soit à Vénus génitrice, soit à Hermès consolateur.* Toute cette mythologie avait alors un sens philosophique et profond.»

(p. 228 「第11の手紙」強調筆者)

こうして空間が重層化され、彼方がここになり、ギリシャ、シテール島そしてウェヌスの神殿がヴァエロワに現出するのであり、まさしくこれは魔術的な地理と言えよう。

ここには『シルヴィ』で完成に到る、諸事象の重ね合わせによる物語の意味の二重化——文字通りの意味と寓意的な意味——の祖型が見て取れよう<sup>4)</sup>。アンジェリックの手記は、単独ではその孤立性のゆえにただ言葉通りの意味しか持たない。しかし、一つの類似性をめぐり遠く隔たった様々な事象が呼び合うことによって、貴族の娘の駆け落ち話という個人的体験

の背後に、時空を超越した純粹な愛の充足という普遍的な、そして何よりもネルヴァルの神話世界が形成されていくのである。

## II

II. 1. さて、上記のように空間を重層化させ神話的風景を現出させる一方で、「私」の散策はヴァロワの町々の事物・風物にまつわる歴史や思い出を喚起することによって、様々な時代の出来事そして人物たちを重ね合わせていくのである。さらにここでもネルヴァルが注釈を加えることによって次第に歴史が再構成され、もはや直線的・客観的な歴史ではなく、ネルヴァル独自の、類似の事象・人物がかわるがわる姿を現す輪廻的な歴史世界が提示されるのである。

まず「第8の手紙」では、ヴァロワ地方にまつわる旧教同盟時代の旧教徒と新教徒の闘争の歴史が回顧されている。ここでネルヴァルはこの対立の起源を、ヴァロワの人々の祖先である平等主義で独立不覇のフランク族と、ローマとその文明に属するガロ＝ロマン族の闘争という、種族の対立にまで遡らせているのである。

«La lutte de deux races différentes est évidente surtout dans les guerres de la Ligue. On peut penser que les descendants des Gallo-Romains favorisaient le Béarnais\*, tandis que l'autre race, plus indépendante de sa nature, se tournait vers Mayenne, d'Épernon, le cardinal de Lorraine et les Parisiens.» (p. 207)

[\*筆者注：le Béarnais とはアンリ四世のこと]<sup>5)</sup>

そして続く部分では、フランク族の末裔であるビュコワ一族に関する因果について、ネルヴァルは次のように注釈している<sup>6)</sup>。

«Et même ce grand comte Longueval de Bucquoy, — qui a fait les guerres de Bohême, — aurait-il gagné l'illustration qui causa bien des peines à son descendant, — l'abbé de Bucquoy, — s'il n'eût, à la tête des ligueurs, protégé longtemps Soissons, Arras et Calais contre les armées de Henri IV? (. . .)

Etonnez-vous maintenant des persécutions qu'eut à subir l'abbé de Bucquoy, sous le ministère de Pontchartrain\*.» (p. 207)

[\*筆者注：ルイ十四世時代の財務長官]

一方、このド・ビュコワ伯爵の子孫であるド・ビュコワ神父の、ルイ十四世に対する反逆は、「第10の手紙」の中で次のように紹介されている。

«(…) il proposa plus tard aux états unis de Hollande, en guerre avec Louis XIV, «un projet pour faire de la France une république, et y détruire, disait-il, le pouvoir arbitraire.» (p. 222)

つまり、平等主義のフランク族の末裔であるド・ビュコワ伯爵がブルボン王朝初代のアンリ四世の圧政に戦いを挑み、その子孫であるド・ビュコワ神父もまたブルボン王朝三代目のルイ十四世の圧政に挑戦し、そして迫害されたというのである。

ところで、ド・ビュコワ神父の祖先であるこのド・ビュコワ伯爵の名は、既に「第3の手紙」に登場しているのである。「私」は本探しの途中で、ボヘミア戦役を戦ったこの伯爵に関する本に出会ったのである。そこには次のような記述が見られ、これは圧制と戦うフランク族とビュコワ一族の宿命的な歴史がヴァロワ散策の過程で素描される伏線になっていると言えよう。

«Mais il n'était pas sans intérêt de posséder ce livre ; car souvent les goûts et les traits de famille se reproduisent.» (p. 177)

ここでも表面上の脈絡の欠如とは裏腹に、テーマ間の密接な関係が見られるのであって、こうした本探しとヴァロワ散策の照応に関して付言するならば、先の引用文に現れた、ド・ビュコワ神父を迫害する大臣ポンシャルトランも、「私」が国立図書館で見つけた当時の警察記録の中に現れる人物なのである（「第2の手紙」）。この場合、本探しの脱線はヴァロワ散策と通底しあって、散策の進行と共に形成されていく循環的な歴史の前兆あるいは裾野をなしていると言えよう。

II. 2. ではド・ビュコワ神父の大伯母であるアンジェリックについてはどうかと言うと、ここでもネルヴァルは、反逆の一族の宿命を示そうとするかのように、プレ・オリジナルにあたる『塩密輸入人たち』ではアンジェリックの手記を始めるにあたって、次のように記述している。

«Cela fera patienter vos lecteurs encore touchant les aventures de son neveu l'abbé, auquel elle semble avoir communiqué son esprit d'indépendance et d'aventure.» (p. 1271 強調筆者)

実際、彼女の身分違いの結婚は、家庭をも軍隊式に取り仕切っている専横な父親の権威に対する反逆であると同時に、父親が軍人として仕えているルイ十三世を頂点とする社会称序に対する反逆でもあるのだ。さらには、平等を唱えているはずが、政治権力と結びついているキリスト教のヒエラルキーに対する反抗でもあることは、彼女の物語がコロナの恋に重ね合わされたことで明らかであろう。

ところで「第7の手紙」でネルヴァルは、父性的権力に対するアンジェリックのこうした反逆を『ルイ王様の娘』という民謡と重ね合わせることによって強調し、彼女の物語を寓意化しようとしているのである。父親によって愛する男から遠ざけられたアンジェリックが駆け落ちを決意する場面に移る前に例によって中絶し、ネルヴァルはこの地方で集めた唄の中からこの地方の父親の性格を表したものを紹介すると言って『ルイ王様の娘』という民謡を引用する。ルイ王の娘はロートレックという貧しい騎士との結婚を望むが、王は怒って娘を塔に閉じ込めようとする。それでも娘は心を変えるよりは塔にいたいと言うのである (p. 195-6)。王の娘と貧しい騎士の身分違いの恋、父であり王である絶対者に対する反逆。アンジェリックの物語との類似は明らかであろう。この類似に基づいて「第8の手紙」でネルヴァルは次のような注釈を加えている。

«Quant à Angélique de Longueval, c'est l'opposition même en cote hardie. Cependant elle aime son père, et ne l'avait abandonné qu'à regret. Mais du moment qu'elle avait choisi l'homme qui semblait

lui convenir, — *comme la fille du duc Loys choisissant Lautrec pour cavalier*, — elle n'a pas reculé devant la fuite et le malheur, (. . .)»  
(p. 207 強調筆者)

ここにも、類似性に基づく事象の近接現象が存在するのであり、まさしくプルーストの言う、ネルヴァルにおける「二つの影像、二つの観念の間にある最も重要な関係の正しい知覚」<sup>7)</sup> を見ることができよう。こうしてアンジェリックをルイ王の娘にたとえることによって、ネルヴァルはアンジェリックの物語が絶対者に対する反抗であることを示すと同時に、この反逆を単なる偶発的・個人的出来事から解放し、フランク族の末裔の住むこのヴァロワ地方の娘の永遠の本質に融合しようとしているのである。

II. 3. こうして専制とそれに対する反逆というテーマをめぐって歴史の再構成が進行し拡張されていくのだが、「第 11 の手紙」では大革命の前夜、エルムノンヴィルの城館に集まって専制社会の変革を唱えた見神論者たちの思い出が語られている。ここでも、ドイツとフランスの見神論者たちが、フランク族という共通因子によって結び合わされているのである。

«Les Illuminés français et allemands s'entendaient par des rapports d'affiliation. Les doctrines de Weisshaupt et de Jacob Boehm avaient pénétré, chez nous, dans *les anciens pays francs et bourguignons*, par *l'antique sympathie et les relations séculaires des races de même origine*.» (p. 226 強調筆者)

そして最後に、ヴァロワ散策による歴史の遡及はソワソンで終わるのである。ここでネルヴァルはソワソンの壺に関する有名な逸話を語り、フランスにおける専制主義の起源としている。ソワソンの戦いでクローヴィスがローマ軍を破ったあと、ランスの司教から取奪品の壺の返却を求められ、クローヴィスは教会との和解という政治的目的のためにこの宝物を利用しようと考えたのである。そこでネルヴァルは次のように書いている。

«Ce fut alors qu'un de ses guerriers voulut que ce vase entrât dans le partage, car l'égalité était le principe fondamental de ces tribus franques, originaires d'Asie. Le vase d'or fut brisé, et plus tard la tête du Franc égalitaire eut le même sort, sous la *francisque* de son chef. Telle fut l'origine de nos monarchies.»

(p. 236 「第 12 の手紙」)

II. 4. こうして、いかなる時代に立ち止まろうとも、圧政者とそれに反逆する平等主義のフランク族が姿を現す循環的な歴史世界が浮かび上がるのである。ここには、ネルヴァルが『東方紀行』の『暁の女王と精霊の王ソロモンの物語』で描き出した、嫉妬深い復讐の神エホヴァ(アドナイ)とその忠実な下僕ソロモン、そしてそれに常に対立し戦いを挑むカインの一族の一人アドニラムとの類似を見出すことができよう。そして実際に、ネルヴァルはこのフランク族が東方に起源を持つことを常に強調して、彼らとカインの一族との類似性あるいは同一性を暗示しているのである。

«(. . .) l'égalité était le principe fondamental de ces tribus franques, originaires d'Asie.» (p. 236)

「第 10 の手紙」では、廃墟となった城で見かけた石棺に横たわる骸骨について、次のように書かれている。

«A voir ce squelette couché dans une auge de pierre, j'imaginai que ce n'était pas un moine, mais un guerrier celte ou franc couché selon l'usage, — avec le visage tourné vers l'Orient, (. . .)» (p. 223)

さらに、フランク族の末裔であるド・ビュコワ神父について、次のような記述が見られるのだ。

«A l'exemple des *fakirs* et des *derwiches*, il parcourait le monde, pensant donner des exemples d'humilité et d'austérité.»

(p. 222 「第 10 の手紙」強調筆者)

そして決定的な事実として、「第 5 の手紙」で、アンジェリックの手記を

中断するに際してネルヴァルは次のような表現を用いているのである。

«Je ne voudrais pas imiter ici le procédé des narrateurs de Constantinople ou des conteurs du Caire, qui, par un artifice vieux comme le monde, suspendent une narration à l'endroit le plus intéressant, afin que la foule revienne le lendemain au même café.»

(p. 186)

『東方紀行』において、アドニラムの物語が、コンスタンティノーブル(イスタンブール)のカフェで伝説語りの芸人が二週間に渡って語りきかせるままをネルヴァルが記述した、という設定になっていることを思い起こすならば、これは単なる譬えではなく、カインの末裔という反逆の一族を、フランク族そしてビュコワ一族に投影していることは明らかであろう。

II. 5. これまで見てきたように『アンジェリック』は、ネルヴァルが『東方紀行』で追求した時空を超越した神話的形姿を、現実の個別的事象と融合する試みであると言えよう。『東方紀行』以後のネルヴァルの創作活動は、永遠の神話的世界と、時間と空間の条件に閉鎖されて生きている日常的な自己との間に接点を見出し、客観的・直線的時間を超越して永遠の生に到達する、個人神話の創造を目指していたのである。そしてヴァロワという、彼自身の幼年時代の思い出に満ちた場所であると同時にフランス史の記憶に満ちた場所がこの融合の場所を提供しているのである。

『アンジェリック』においてネルヴァルは、ヴァロワ散策という形式を借りて歴史上の様々な事象・人物を呼び起こし、注釈や引喩、風景描写といった巧妙な手段によって神話的形姿に引き寄せ、アンジェリックの物語をコロナの恋に、そしてビュコワ一族あるいはフランク族を、嫉妬深い神エホヴァの圧制に反逆するカインの一族に重ね合わせているのである。こうして彼らの個人的体験はその孤立性・偶発性を脱し普遍的意味を与えられるのであり、時空を超越した純粋な愛の充足、そしてそれを阻む現実世界を統べる絶対者への反逆という、ネルヴァル神話のテーマを体現することになるのである。

ここで重要なのは、既に何度か述べたように、諸事象のこうした重層化の根拠となっているのが、神話的形象と現実の事規との類似性の知覚だということである。この類似性の知覚は、ネルヴァルにとって現実認識の根本であると同時に創造原理でもあるのだ。ネルヴァルは常に諸事象を比較し、近づけ、そして関係づける。こうした、アナロジーに基づく世界の諸事象の再把握によってネルヴァルは世界を統合する根源的なアイデアに到達しようとするのである。そうした独自のヴィジョンは、様々な女性の中に同じ特徴を求め、それがついにはイシスの女神のうちに収斂するといった事実にも表れているのであり、それが『幻想詩篇』や『オーレリア』の最終章「メモラブル」において展開されるあの宇宙神話となって結実するのである。『アンジェリック』においては、こうしたヴィジョンに基づいて混沌の中から諸事象が次第に統合され、神話的形姿を構成していく過程を目の当たりにすることができるのである。

さて、『火の娘たち』に収められた次の作品である傑作『シルヴィ』との関連で言えば、『シルヴィ』で登場する神話的自己は『アンジェリック』においてはまだ姿を現していない。しかし、既に見たように、ネルヴァルが再構成する輪廻転生的な歴史の中では、彼が『東方紀行』で共感を寄せたあのカインの一族、そして『幻視者たち』で研究した、建築家アドニラムの物語を伝説的起源とするフリーメーソンたちといった、彼の精神的祖先あるいは分身とも言える存在が集結し巨大な血族の連鎖を成しているのであり、以下の章で述べるように、『アンジェリック』は『シルヴィ』で登場する神話的自己の前史を成していると言えるのである。

それにしてもこれはリアンセ法案という圧制に対するなんたる皮肉であり、また挑戦であろうか。ネルヴァルは表面上はこの改正案の定めるところに忠実であり、その結果が『アンジェリック』のこうした断片的構成なのである。アンジェリックの物語自体は史実に基づいた記録の転写であり、「私」の本探しやヴァロワ散策記自体も即物的な記録であり、小説らしい筋が欠如しているという点で、件の改正案が要求する客観的事実を表象しているのである。しかし、こうした断片的構成こそが、単独ではいわ

ゆる現実の表象にすぎないものの相互交流を生み出し、神話的世界、それも圧制に反逆する者たちの神話的世界を構成するばねになっているのである。まさしく『アンジェリック』こそは、「リアンセ修正案から湧き出たとらえがたき小蠅」(p. 216「第10の手紙」)であると言えよう。

### III

さて、こうして再構成された、圧制とこれに反逆する者たちの円環的な歴史世界は、当然リアンセ修正案施行という圧制に直面した現在の「私」にも波及するのであり、ド・ビュコワ神父をめぐる本探しの脱線やヴァロワ旅行の意味も変容をとげるのであり、これは「私」が圧制に反逆するカインの一族であるという宿命を知るための、神話的自己の起源探究の旅となるのである。「第3の手紙」では既に《*La fatalité qui me poursuit à propos des Bucquoy*》(p. 178) という暗示的な表現が見られるのであり、「第5の手紙」には、ビュコワ一族と自分の間に血縁関係を設定しようとするかのような、次のような文章が見られるのである。

«Il y a quelques semaines, je commençais déjà à faire le plan du travail que vous voulez bien publier, et je faisais quelques recherches préparatoires sur *les Bucquoy, dont le nom a toujours résonné dans mon esprit comme un souvenir d'enfance.*» (p. 187 強調筆者)

こうして、一見偶然にすぎないように思われたド・ビュコワ神父あるいはアンジェリックとの出会いは次第に宿命の色調を帯びるのである。そしてここでも『東方紀行』との照応が見られるのであって、『アンジェリック』におけるド・ビュコワ神父の存在は、『暁の女王と精霊の王ソロモンの物語』におけるトバル＝カインと同じ役割を果たしているのである。アドニラムは先祖であり守護神であるトバル＝カインに導かれ、両者の共通の祖先であるカインの一族が嫉妬深い神アドナイ(エホヴァ)の圧制を逃れて暮らす地下世界へと赴き、カインから自分たち一族の起源について教示されるのである。すなわちこれは冥界下りである。

まずド・ビュコワ神父が冥界への案内役であることは様々な形で暗示されているのであって、例えば「第10の手紙」では神父について次のように書かれている。

«Il se faisait appeler *le Mort*, et tint même à Rouen, sous ce nom, une école gratuite.» (p. 222)

また「私」がやっと手に入れた『ド・ビュコワ神父の物語』には「*L'Enfer des vivants*」という標題と「*Facilis descensus Avernus*」つまり「地獄ニ降りルハイト易シ」(p. 240「第12の手紙」)というウェルギリウスからの引用句があり、これによって、ド・ビュコワ神父が現世と冥界との仲介者であることが示唆されていると言えよう。

一方「私」のヴァロワ散策が冥界下りであることも、散策の途中に見られるいくつかの記述によって示されている。まずネルヴァルは「私」の散策が始まるのが「死者の日」すなわち万霊節であることを繰り返し言及しているのである。

«Mais demain, *jour des Morts*, c'est un pèlerinage que j'accomplirai respectueusement, tout en pensant à la belle Angélique de Longueval.» (p. 180「第4の手紙」強調筆者)

«C'est *le jour des Morts* que je vous écris ; pardon de ces idées mélancoliques.» (p. 190「第6の手紙」強調筆者)

さらに「第6の手紙」には、「デルフィーヌ」という幼年時代の回想が語られているが、これも地獄下りに関わるエピソードなのである。

«J'ai assisté autrefois à une représentation donnée à Senlis dans une pension de demoiselles.

On jouait un mystère, — comme aux temps passés. — La vie du Christ avait été représentée dans tous ses détails, et *la scène dont je me souviens était celle où l'on attendait la descente du Christ dans les enfers.*» (p. 192 強調筆者)

こうして「私」のヴァロワ散策は一つの冥界下りとなるのであり、アドニ

ラムと同様、「私」はこの地下世界で様々な時代、場所、社会を通じて常に  
圧制に立ち向かうカインの一族の歴史に遭遇し、そしてまた自分の宿命を  
知るのである。

ところで、こうした冥界下り、起源探究の旅で出会う祖先たちの中で、  
ネルヴァルが最も深い啓示を受けるのが、ルソーをめぐるエピソードであ  
ろう。エルムノンヴィルで「私」は一つの奇妙な伝説を村人から聞くので  
ある。

«Voici la tour où était enfermée la belle Gabrielle . . . tous les  
soirs Rousseau venait pincer de la guitare sous sa fenêtre, et le roi,  
qui était jaloux, le guettait souvent, et a fini par le faire mourir.»

(p. 229 「第 11 の手紙」)

アンリ四世 (1553-1640) とその愛人ガブリエル・デストレ、そしてルソー  
(1712-78)。民衆が、二百年の隔たりを超えてこれらの人物たちの思い出  
を一つにして嫉妬深い王、塔に閉じ込められたその愛人、そして彼女が心  
を寄せる若い恋人にしてしまったのは、先に言及した民謡『ルイ王様の  
娘』と重ね合わせたからであろう。しかしそれ以上に、ネルヴァルはこの  
伝説の中に、嫉妬深い神エホヴァの下僕であるソロモン王、女王バルキス  
(シバの女王)そして王によって暗殺されたアドニラムとの類似を見ている  
のである。さらには、アドニラムは地下世界でトバル = カインから、自分  
がエホヴァの忠実な下僕であるソロモンを滅亡させる宿命を帯びているこ  
とを教えられるのであるが、ネルヴァルはこの伝説の中にそうした予言の  
成就、カインの一族の輝かしい勝利の予兆を読み取っているのである。

«Le sentiment qui a dicté cette pensée est peut-être plus vrai  
qu'on ne croit. Rousseau, qui a refusé cent louis de Mme de Pom-  
padour, a ruiné profondément l'édifice royal fondé par Henri. Tout  
a croulé. Son image immortelle demeure debout sur les ruines.»

(p. 229)

歴史的な存在としてのルソーは滅んでしまった。しかし民衆の幻想の中で伝

説化・神話化されることによって永遠の生命を得たのである。ネルヴァルは、ここに自らの個人神話創造の根拠を見出すのであり、さらに専制に反逆するカインの一族としての運命を完遂すべしというメッセージを受け取るのである。

かくして、レシの冒頭でリアンセ法案という圧政の前になすところなく、偶然と混乱に身を委ねていた「私」は、カインの一族という自らの起源に到達することによって、日常的自己の根拠なさを脱却し、時空を超越した神話的存在へと飛翔する糸を掴むのである。『シルヴィ』において、G. プーレの言葉を借りれば「人間の運命を主題とする形而上的寓話」<sup>8)</sup>の主人公として、そして『オーレリア』においては宇宙解放の神話の主人公として、「私」は登場する。従って『アンジェリック』はそうした神話的自己の誕生を記した作品であり、まさしく『シルヴィ』や『オーレリア』の序章を成していると言えよう<sup>9)</sup>。

#### 註

- 1) この法案は、反動主義的政治家リアンセ伯の提出したもので、1850年7月に施行された。その内容は。

«Tout roman-feuilleton publié dans un journal ou dans son supplément sera soumis à un timbre de un centime par numéro.» (Duvergier, *Recueil des lois* [ . . . ], 1850, p. 321.)

1848年以來新聞において顕著になりつつあった反体制的思想の抑圧を狙ったというのが、この法案の実態であるらしい。上記の引用も含めて、以下を参照した。

Jacques Bony, «Les Faux Saulniers. Notices.» in “*OEuvres complètes II* de Gérard de Nerval”, publiées sous la direction de Jean Guillaume et Claude Pichois 1984. (Bibliothèque de la Pléiade) p. 1314.

- 2) 以下、ネルヴァルからの引用は次の版に拠った。  
Gérard de Nerval — *OEuvres I*, présentées par Albert Béguin et Jean Richer, 1974. (Bibliothèque de la Pléiade)
- 3) さらに、『アンジェリック』の最後にある、「反省」と題された架空の読者との空想的な対話の中で、ネルヴァルは自分のこうした戯言的性格の語りの先駆者としてスターンやディドロなどの名を列挙しているのだが、この対話自体が、ノディエの『ボヘミアの王の物語』の中の「反論 (Objection)」という対話から着想を得ているとのことである。

cf. Jean Richer, *Gérard de Nerval, Expérience et Création*, Hachette, 1963, p. 293.

- 4) 以下、ネルヴァルにおけるアナロジーの原理そしてそれによる物語の二重化については、拙論を参照されたい。「想像力と構成の原理——Gérard de Nerval の“Sylvie”について」『芸文研究』第46号(1984年)
- 5) ネルヴァルが種族の問題に関心を寄せていたことは周知の事実であるが、小説『ド・ファイヨール伯爵』(1849年)でも、ヴォルネー伯という実在の人物の口を借りて、フランク族=貴族階級、ガロ・ロマン族=町人階級という持論を述べている。
- 6) 以下フランク族そしてビュコワ族を中心とする考察については、次の研究に負うところがあった。

Gabrielle Malandain, *Nerval ou l'incendie du théâtre*, 1986, Corti. chap. 2.
- 7) マルセル・ブルースト「フローベールの〈文体〉について」。訳文については、保莉瑞穂「ブルースト・印象と隠喩」, 筑摩, p. 189 を参照した。
- 8) Georges Poulet, «Sylvie ou la pensée de Nerval» in *Trois essais de mythologie romantique*, Corti, 1971, p. 15.
- 9) こうして、神話的自己の探究という観点から『シルヴィ』との緊密な関係が生ずる以上、『火の娘』に収録される際にプレ・オリジナルである『塩密輸入たち』から『ド・ビュコワ神父の物語』が削除されたのは当然だと言えよう。